



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	網走市役所
Description	第2部資料編 第1章インタビューの記録7 日時:2004年11月11日10:00~11:30, 場所:網走市役所, 話し手:山真夫・小田島和之, 聞き手:姉崎・光本・石山・佐々木・滝ヶ平
Citation	高等継続教育研究, 4, 142-149
Issue Date	2005-09-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35136
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_p142-149.pdf



7. 網 走 市 役 所

日 時 2004 年 11 月 11 日 10:00~11:30
場 所 網走市役所
話し手 山 真 夫 氏（網走市企画総務部企画調整課長）
小田島和之 氏（網走市企画総務部企画調整課企画係長）
聞き手 姉崎・光本・石山・佐々木・滝ヶ平



山氏（中央）・小田島氏（左）

卒業生の受け皿

山 東京農業大学についてですが、学生さんや先生方が生活されることでの経済効果もありますし、農業の他、水産とか、通常のいわゆる教養の部分もあるので、審議会の委員にもなっていていただくなど、いろんな活動で貢献していただいています。唯一の大学ですから、非常に存在感が大きいと思います。大学の卒業生が本当は網走に就職していただければいいのですが、何しろ受け皿がないのが大きな悩みです。

姉崎 受け皿という点では、他のところでもそういう点はおうかがいするのですが、日本全体が経済的に少し長い不況に入っていて、地元で働きたいといってもなかなか職がない、卒業してもここにいたいけれどもいられないということはよくうかがいますけれども、その傾向は当初からでしょうか。

小田島 農業後継者的な人も昔は多かったという話でしたけれど、いまはそうばかりでもないようです。地元に戻りたいという方もかなりいらっしゃいますし、選んでこの学校、この地域に来たという人も結構います。卒業のときに大学で満足度調査みたいなかたちでアンケート調査を卒業生にやっているのですが、その結果を見るとここにいた4年間に「満足した」という評価が多くて、できればこの地域で就職したいという意見も毎年あるようです。

しかし、この地域は大規模な共同体のような農業形態が多いこともあって、新規参入がなかなかしづらい農業地帯だということもあります。ですから、就職先が限られてきます。例えば、農協等の団体や、あるいは北海道庁とか網走市役所といった官公庁への希望が多くて、そうなるといまのご時勢、受け皿としての部分は非常に厳しいものがあります。ほぼ9割は出身地に帰ってしまうと思います。細かい数字は把握していないのですが、8割ぐらいが道外出身者で、北海道に残る方は何十人といった単位でしょうか。

姉崎 市役所にも一定数農大の出身者がいるのですか。

小田島 網走の学部から卒業生がはじめて出たのは平成4年度です。それから、ほぼ毎年何人かずつ入っています。いまは20人くらいいるんじゃないですか。

姉崎 一定勢力ですね。

小田島 そうですね。単体の大学としては上位を争う大勢力になってきているように思います。

光本 技術系の方ですか。事務系の方ですか。

小田島 事務系ばかりです。

山 技術系といっても市役所には農業の研究とかといった職種はないので、そういうかたちで入ることはありません。

姉崎 そういう方々は必ずしもこの出身でもないのですか。

小田島 ほとんどが他地域の出身者です。

光本 この場所を選んで来る学生がいるというお話でしたが、それは何か理由があるのでしょうか。

小田島 北海道への憧れがあるでしょうし、キャンパス見学会とかオープンキャンパスとかいろんなかたちの中で、やはりこの地域への憧れがあるのではないのでしょうか。北海道へ来たいというのも大きいと思います。北国における生活体験、農業の実習も他と違っていているというのもありますし。

姉崎 紋別を夏に訪れたときは、学生の落とすお金による経済効果もあるけれども、夏場のホタテ漁などで

の貴重な労働戦力でもあるとのことでした。農大の場合は規模がそれほど大きくないということもあるでしょうが、ある程度定着してくると、この地域における大学生のもつ潜在的な可能性を考えると、一定の意義を持っていると思うのですが。

小田島 大学院生を合わせると1600人近くになっています。この地域は漁業も農業もあり、人手のかかる作業がかなりあって、貴重な戦力となっているようです。学生でなければできない仕事もあるでしょうね。

姉崎 いまは試験捕鯨をしていて、真夜中にその解体が始まるので、そういうときに動けるのが学生しかなくて大事だとかがいました。

小田島 ホタテの稚貝を撒いたりするのも、夜中に出て行って朝方までの作業ですが、1回の作業に何十人も学生がアルバイトをしていると思います。あと農業関係にもかなり就いていると思います。

研究・教育に対する地域の期待

姉崎 大学側は評価されるときには、大学が来た経済効果で評価されると必ずしも嬉しいことではなくて、そこにいることの教育研究上の効果を評価してほしいと思ったりするのですが、そういう点では網走に進出してきた農大がどのように期待に答えてほしいと市側は考えていますか。

小田島 産学官の交流という中では大きな柱として学の部分の役割を果たしてもらっていると思います。民間の中に先生方が入られて、網走だけではなく近隣市町村も含めた中で活動されている方も多いです。農大の先生方も、その地域に大学がある意味がないと存在価値がないといわれます。実学の精神という農大の精神もあって、地域の中でいっしょになってとりくもうとされている方が多いと思います。

姉崎 研究的にも生物産業学部のある程度は、フィールドワークを前提とした学問分野のような感じがして、大学の中に閉じこもって何か実験だけをしているというのではなくて、かなり地域に出かけているスタイルの先生が多いように思うのですが。

小田島 黒瀧先生のところに行かれると大学間交流協議会の話が出てくると思うのですが、あれも火付け役となったのは農大の先生方で、黒瀧先生はずっと事務局をやられていますし、そういった意味でも、知恵の部分で必要とされる大学でなければならないと思っていらっしゃると思います。そういう意味では、農大がこの地域に来たことによって、いわゆる単科大学の集まりですが、それぞれ違う分野の大学がここで一

つになると、オホーツク地域で総合大学になるのと同じような意味合いになるという話がありました。

光本 産学官とおっしゃいましたが、「官」として、市役所が仲立ちをして大学と地域をつなぐことはあるのでしょうか。

小田島 仲立ちとして地域をつなぐというよりも、大学には立場としてコーディネーター的な役割を担ってもらったりしています。

あとは、先生方が独自にいろんなところに行かれています。農協関係の組織や林業関係の組織などです。「官」の中には道庁があつたり、開発建設部があつたり、一定のところとも連携をされていますので、何か事業を考えていたり、あるいは何か動き出そうとしたときには、基本的には農大にということを我々は考えなければならないと思っています。当然、分野のないところでは、北大とかいろんな先生方ともつきあいがあります。あと、ここで足りない部分は、世田谷校を含めて東京農業大学全体とのつきあいがここを窓口としてありますので、単純にオホーツクキャンパスだけの話じゃなくて広がっていきます。

姉崎 網走市と世田谷にある本体との交流も実際はあるのですか。

小田島 農政サイドの方は本校との委託研究をやったりしています。あと網走市には寒冷地農場が昭和58年にできました。そこは農大と地元の生産者の営農集団がいっしょになって研究をするという実習農場です。その実習農場があつて、ずっと地域連携で農業研究をしてきたというのも、農大がここに来ることになった大きな要因となっています。あとは、市長が農大の評議員となつていますので、その関係で評議会だとか、入学式卒業式等を含めた中で、本部の理事長以下、学長など向こうの幹部が来られますので、交流があります。そういう意味では、市と農大は密接な関係を持っていると思います。

姉崎 研究上の協定などはあるのですか。

小田島 農大の生物資源開発研究所が契約の窓口となつていまして、市は経年的なかたちで分析などをお願いしています。あとは、農大の先生方に参画をいただいている事業がいくつかあります。

そのほか、農大との提携関係としては、観光関係の中で、大学のPRと学生確保対策の事業の一環として、網走市が出かけていく観光物産展で農大のパネルを展示したり、あるいはオープンキャンパスに市の方から職員を送り出して学生から相談を受けたりしています。それから平成16年では、JALの機内誌に農大

と協力してオホーツクキャンパスと網走市というページを出したりしています。学生に対する記念品や体育文化活動で出かけるための一部費用の助成をやっている生物産業学部の協力会への負担金はありますが、市から大学に対する直接的な財政支出はありません。徐々に農大との連携関係は広がっています。

政策塾

姉崎 グリーンビジネス、コミュニティービジネスなど、網走市全体の地域づくりにかかわるような、政策的な学習をする塾を開催されていますけれども、ここではそういうことに関心のある市民や市の職員を、いわばキーパーソンとして養成するということですか。

小田島 はい。一般公募で関心のある方を募集しています。まもなく報告書をいただくことになっています。基本的には委託事業というかたちをとっていますが、先生方への謝礼はありません。地域づくりの一つとしてお願いしています。

姉崎 面白そうですね。報告書は提言に近いものですか。

小田島 去年の6月から始めて、中間報告会を今年の1月にやって、3月に仮報告をしていただきました。いま17年度の予算編成作業の中で、市民からの提言として何とか予算反映ができるかできないかを考えています。市は提言の中身には関与していません。変な意味での「まる投げ」です。市民が実際に、市に対してどのような政策を期待しているのかを含めて出していきたいと考えています。本当の民主導の部分の政策として運営してもらっています。

光本 こういった研究活動をするというのはよくあると思うのですが、市が直接やる場合と比べて、大学がやることの効果はあるのですか。

小田島 従来の審議会等では、そんな意図がないにしても結論が先にあるような市民参加といわれがちでした。これはそういうことが全くありません。だから耳の痛い話もいっぱい出てきます。あくまで提言を受けてそれをどうするかを決めるのかは市ですけども、ある事業について、なぜ受け入れられたか受け入れなかったか、政策塾では診断をするわけです。そういうやり取りができる始まりの機会にしたいと思っています。大学には、その橋渡しをする、舵取りの役目を期待しています。

市と大学のパートナーシップ

姉崎 そういう意味では、市と大学との関係は比較的

対等なパートナーシップと考えられますね。網走市と農大は当初から対等な関係だったのでしょうか。

小田島 ここの地域につくることが決まった段階では、市は土地の無償提供と建設費の部分を市民寄付として集めて大学に出しています。そこからアパート建設などの建設需要が進んで、当初投資額をはるかに上回る市に対するバックがありました。大学サイドも自分たちのお金の中でキャンパスの充実を進めていますので、市が農大に財政支援で重く感じていることはまったくありません。

姉崎 そういう点では望ましい関係ですね。どっちかが負担に感じればパートナーシップはなかなかうまくいかないですからね。

小田島 今後どうなるかは分かりませんが、いまのところ、そういうところにウエイトを置いた話はありません。それよりも、農大の先生方はこの地域にある意味があるかないかが大事だといわれますね。私立大学ですし、営業のことだけを考えればどこでもいいわけですが、ここに来て、ここに存在する意味を考え続けることが大事だといわれます。

連絡会

光本 大学と年に2回の連絡会をしています。具体的にはどのような連絡・協議事項があるのですか。

小田島 連絡会は1月と7月にやっています。7月は、市の農政や水産を含めた課長レベルと大学の学科長の20名くらいが出席します。それぞれの現状、課題について意見交換をしています。1月は、予算編成の部分がありますので、市長・部長レベルと学部長レベルの10名程度で政策的な話をします。予算の詰めなども議題となります。こんなことをいま考えているとか、こんな要請があるとかいう話が出されます。昨年はJALの機内誌の話が出てきました。あと、社会教育の一環として、「子どもと動物のふれあい事業」というのがあります。市長が子どもたちに動物と触れ合う場をつくりたいという話をしました。いままで管理するところがなく実現できなかった想いですが、農大が動物の管理施設をつくったのをきっかけに、市が小動物用の飼育舎を農大のところにつくったらいっしょに管理してもらえるかということで話が盛り上がりました。これが実を結び、夏の間の土日に芝生のあるところに農大の動物を運んで、子どもとのふれあいを図るという事業をやっています。

光本 連絡会は開学以来ずっとやっているのですか。

小田島 一時期途絶えていたのですが、3、4年くら

い前からまた復活しています。一時期マンネリ化して、お互いに現状報告と陳情要望だけで終わるという場になってしまい、こんな感じだったら休止しようという時期があったようです。

姉崎 この16年間で市長は何人代わったのですか。

小田島 2人です。

姉崎 首長が変わると市政の方向がずいぶん変わることがあるのですが、2人とも農大との関係では同じスタンスですか。

小田島 そうですね。当初の市長は誘致したときからの市長ですし、現市長も市の職員OBですので、経済部長とかいろいろやっている中で、農大との連携もありました。

校友との関係

光本 農大ができるときに、校友のバックアップが非常に大きかったと農大の学校史に書かれているのですが、いまでも農大の校友の方々が市の内外におられて、そういう役割を果たしているのでしょうか。

小田島 直接的には、校友会の方々の部分で市に対して何かという話はあまり聞きません。この地域だけでなく全国の校友の組織の人が入学式など大学関係のレセプション等にいらっしゃるというのはありますけれども、そのへんのことについては、大学の方に聞いていただく方がいいように思います。

光本 では、特に市として校友会とお付き合いしていることはないということですか。

小田島 そうですね。誘致の段階のお話ではそれはあったと思うのですが、現在は特に聞かないですね。

農業後継者の養成

光本 農大の誘致のきっかけは、網走南ヶ丘高校の定時制農業科の募集停止だったといわれていまして、当時は、地元の農業後継者を今後どういうふうに育てるかが議論されていたと思うのですが、それが農大ができたことで果たされているのかどうか、市の方はどういうふうにお考えなのか、教えていただきたいのですが。

小田島 農大に市の農業後継者が何人入っているかという話になるかと思うのですが、数えるくらいしか入っていないと思います。卒業した学生がどうしたかという話になると、実は市役所の中にも市内の農業後継者でありながら、市の職員になっている人間もいます。どこもそうなのですけども、農業の後継者・担い手対策をやっているのが実は農家の息子で、という

話が実はよくあるのです。

ここは経営規模が結構大きいのと、営農集団というかたちでやっていることもあって、農業後継者が全然いなくなって廃業するというケースは他から見ると少ないと思います。後継者がいなくてやめていく部分というのは、なかなか農業経営自体が難しい地域にあったり、あまり営業成績のよくない農家の人たちで、遅かれ早かれ後継者がいても継続できないという方々もあると思うんですけども、耕作放棄による問題はまだそんなに出ていません。

姉崎 それはこの地域の特性ということですか。

小田島 機械化をした三作中心というかたちができあがっているので、5戸とか8戸とか、そういったエリアごとで機械も全部共同購入、それから収穫作業も全部共同という形態が多く、このへんの農業者は一部を除くと農業所得は高いです。

姉崎 そういう農家を継いでいる方々は、この大学ではなくて他のところに進学しているということですか。

小田島 現在、農業経営の中心になっている世代は、ここに大学ができる前の世代ですが、少しずつ農大出身者も増えてきつつあります。まれに外国に学びに行ってきたりしている人もいます。

地元高校の部分でいうと、大学としても地元の生徒を地域貢献の意味でも入れたいと思っているとは聞くんですけども、推薦枠で入れるというのはあるんですが、一般入試だとほとんど受からない状況です。すぐできる生徒は全然違うところに行くこともありますけれども。

どこもそうなんでしょうけれども、学生のときくらいは、例えば札幌であったりとか、地元ではないところがいいと思う分もあると思います。自分もそうだったからというのもあるんでしょうが、みんなそうなのではないでしょうか。農大サイドもがんばって地元高校回りをして、地元なんだからぜひ地元の人たちに入ってくださいという活動をたくさんやられていると思います。親たちにしてみても、どうせなら自宅から通える大学に通ってほしいというのは結構あると思います。けれども、やはりそれぞれの好みというのがありますからね。

高大連携

姉崎 農大と地元の高校との連携は何かありますか。

小田島 学校に推薦枠を置いているくらいではないでしょうか。

姉崎 帯広畜産大はすぐ隣に帯広農業高校があつて、むしろそっちの方が古くからあつて、帯広畜産大はあとからやってきたみたいな関係のところですが、畜大が入試が難しくなってきたことで、なかなか入れなくなって、別科というのを設けていて、普通入試とは違うのを存続させてきて、歴史の中で重要な役割を果たしてきているようです。ここでは、地元側からそういう農業後継者の養成という意味で何か働きかけをしたとか、そういったことはありますか。

小田島 あまりなかったと思います。再来年に水産に関する新学科ができる予定で、この地域にあつて生物生産学部という中で、せっかくオホーツク海という海があるのに、水産分野については大学としても弱いということで、水産に関する部分をつくるという話をしています。そうすると、今度は漁業関係とか、そのへんは変わってくると思います。

うちの試験研究機関を含め、大学の先生方との連携はいろんなかたちでとろうというのは基本スタンスであると思いますので、あとは地元の企業などの方々がどんなかたちで大学とかかわるかだと思います。大学の敷居というのはなかなか高いというか、入りづらいというのはどこもそうですから、普通の民間の会社の人がぷらっと大学の先生のところに訪ねて行くのはなかなかやりづらい話なので、そのあたりのところは、どこかで意識が変わらないとできないだろうなと思いますけれども。

市の描く大学の将来構想

光本 大学の将来構想のようなお話が出ましたけれども、市側が持っておられる大学の発展方向、農大に限らないと思うのですが、今後の高等教育の将来像みたいなものは何かあるのでしょうか。かつては学園都市構想というのをつくっておられましたね。あの時代は、どこでもああいうのをやっていたと思うのですが、当時は国立大学を念頭において、総合大学、それから学園研究都市というのを掲げておられて、それがいま考え方としてはどうなっているのか。それから、学園計画地ライブラリーに登録されていますが、あれは誘致の意思があることの公式な表明ですから、そのへんも含めて市側のお考えをお聞かせ願いたいのですが。

小田島 非常に難しい話ですが、とりあえずは農大が一つできたということで、意識の中では完結した部分があるんじゃないかと思います。いまは、できた大学に地域の中にどう溶け込んでもらうかとか、地域の中

で大事にしていくかというところになっているんだろうと思います。東京の本校を含めた農大全体と網走市とがどういう関係を持っていくかというのが一番の部分で、将来的な学園都市の話というのは、ライブラリーに載っているかどうかは別としても、あらためて全然違うところにアタックするという考えは基本的にはないですし、持てる状況ではないと思っています。いまの段階では、いかに農大とうまく連携がつかれるか、さらにいい関係に今後なっていけるかというところだとは思いますが。

光本 特に欠けている分野とか必要性が高いけれども存在しない分野はありませんか。農大は女性が進学する場合にどうなのかなと思ったりするんですが。

小田島 学科によっては女子の方がかなりウエイトがあるんじゃないですか。食品科学などは女子が多いと思います。全体でも2割程度はいるんじゃないでしょうか。

姉崎 生物系は全国的に見ても女子が増えてきていますね。

光本 この地域は短大がないので、女子から見ると高等教育の進学先が少ないんじゃないかとも思ったのですが、そういう声もありませんか。

小田島 ここに来る農大の女子学生は、ここに来たいという強い意志を持って来ている方が多いようです。親から見ると遠いところに行くということでは、例えばどこでもいいのですが、東京に出ると網走に来るのとは、飛行機なんかで考えてそんなに時間距離が違わないにしても、「東京は近い」「北海道は遠い」という感じがあつて、それを説得してでもこっちに来たいといってくる子が多いのは、やっぱりその子がどこまで行きたいと思うかです。このへんの子たちがどう思ってどこに行こうかという部分は残念ながら把握していませんけれども、地元で短期大学があつてそこに行きたいかどうかという話になると、それはこちらの大学もそうですけれども、そういうことがいっぱいあるときと大学は撤退しないと思うんです。北見にも北海学園北見短期大学があり、観光とかいろんな分野を持っていましたけれども、なくなってしまったので、女子だから短期大学という話でもないようです。

姉崎 市側で大体捉えられている18歳若年層の進路動向のデータはありますか。

小田島 学校基本調査で高校生がどうなっているかはあります。地元で就職したいが、いま就職できないのでとりあえず専門学校で札幌に行こうか、みたいな

のは多いと思います。

姉崎 その場合は、そこに行きっぱなしですか。戻ってきますか。

小田島 戻ってくる率は少ないと思います。いずれにしても、就職口があるのかなのかというところになります。例えば、やりたい保育だとかがあって短大に行った、それで、就職口があればその子たちは帰ってくるのですけれども、ない場合については仕方ないというふうになってしまいます。出て行くかどうかを含めて、地域に雇用の場がどれだけつくれるのかどうか大きな問題だと思います。

姉崎 そのためのコミュニティービジネスやいくつかの新しい事業、雇用創出をすれば住みやすい場でもあるという認識があると思うのですけれども、それは大学といっしょになって創ろうというのはありますか。

小田島 政策塾が始まる前に、これも農大と協力して、起業家育成の講座をやっていたんです。実際、独立された方も何人か受けた中でもいるのですけれども、もう講座の段階では基本的になくなってきているというのもあって、どこかに働き場所をつくるのもそうだし、働けることを見つける人も必要だろうと思います。育成に関する講座とかそういったものについては、例えば商工会議所が始めたり、他のところでもいっぱいやってきているので、そういった意味で、今回は自らの中で何かビジネスチャンスを見つけることができなにかというかたちの課題で、まったく民間サイドの中で自由に発想してもらおうということで政策塾をつくったのです。だから、これについても今後これを受けてやった人が試しにちょっとやってみたいなというかたちのメニューが、市の中でどれくらいつくれるかという話、それは政策の話になるんでしょうけれど、住みたい人を住まわせられるようなものができるといけません。そのへんのところが課題だと思います。

姉崎 網走市も少子高齢化で高齢化率がかなり高くなってきているのですか。

山 そんなに高くはなっていません。

姉崎 雇用の場が少し増えたということですか。

小田島 いや、農大生の力でしょう。要するに18から22までの部分は歳をとらないで毎年毎年交替しますから。

光本 一定部分は必ず18から22歳なわけですね。

小田島 そういった部分は要素としてはきつとあると思うんです。

滝ヶ平 そこはほとんど率が変わらないで再生産されていくみたいな感じですか。



小田島 そうですね。例えば、うちの高校生の卒業生のほとんどが出て行ったとしても、それと似たような人数が全国から入ってくるというのがありますからね。

水産学科への期待

佐々木 先ほど、新水産学科を設置しようとした動きがあるとのことでしたが、現段階ではどのようなことを把握されているのですか。そういう話をちらっと聞いたという程度なのですか。それとも、また実習場を新たに作るので市に働きかけがあるとか、そういった話なのですか。

小田島 そういふのは来ていないです。市が水産科学センターという施設を一つ持っていて、そこはすでに農大の客員教授といっしょに共同研究などをその施設を使ってやっているということもあって、そのへんの分野として新たに力を入れる学科をつくるということです。付属する施設やなんかを市につくってほしいという話はまだ全然聞いていないです。

佐々木 では、水産科学センターで網走市が保有しているものを利用しての共同研究などする動きとして理解していいのですか。

小田島 そればかりではないのですが、共同研究もすでに進めています。道の施設も、道の内水面室という施設の中にいっしょに入っていますので、このへんの水産の試験研究をそこで進めようということです。

佐々木 漁協組合が窓口になると思うのですが、地元漁業者の動きは何か見られるのですか。

小田島 まだ水産系学科の新設について申請をするということが、いろんな会議とかそんな中で話されたのが新聞等にちらちらと載った程度しかおそらく知らないと思うんです。だから、本格的に学科ができることが決まって、そこで何をするのかというのがカリキュラムを含めて見えてくれば、それからの話だろう

とみんな思っているんでしょうね。

佐々木 現状として、生物生産学部内に若干水産にかかわる研究をする研究室があると思うのですが、現状で結構ですので、何か水産の分野で市とコラボレーションをして行われている事業はあるのですか。

山 そんなに連携としてはないですね。学科のほんの一部ですから。足りないんですよ、実際は。だから学科としてやろうとしているんだと思います。

佐々木 ということは、大学としても可能性を感じている分野なんでしょうか。

山 そうなんでしょうね。学科ができれば水産系との繋がりも強くなっていくんでしょう。

小田島 いまは本当に数名しか水産担当の先生がいないですから。

佐々木 農業の方では、状態がいいというか、経営がうまくいっているようなお話をおうかがいしましたがけれども、水産の方はどうなんでしょうか。

小田島 水産も過去最高に近いくらいの豊漁だと思います。

姉崎 漁業の場合は何が今年の収入増の要因になっているのでしょうか。

小田島 ホタテ、サケ、マスですか。

山 ホタテは数量的には落ちたんでしょうが、値段が回復したのでかなりいいですね。

小田島 サケは他の地域が不漁で、この地域は数量は変わらないけれども、値段が去年から見ると大幅にアップしているということです。

佐々木 今年だけじゃなくて、ここ数年の傾向なんですか。

山 そうですね。サケ・マスにしてもホタテにしても、放流するなり稚魚をまいたりという資源管理型なので、沖合いで取ってくるわけではないので安定しています。

姉崎 これは釧路なんかとはずいぶん違いますよね。遠洋に頼ってなくて。

山 そうですね。

OBの影響力

滝ヶ平 平成元年スタートということで、卒業生を出してから大体10年くらいたっていると思うのですが、東農大の生物生産学部を卒業してから網走に残った人たちというのは、網走市の経済界なりに影響力を持っているのですか。

小田島 影響力を与えるまでまだなっていないです。最初の年に入ったとしても30ちょっとくらい、22で

卒業して32くらいですから、まだまだ影響力があるところまではいかないと思います。

ただ、商工会議所ですとか農協ですとか、金融機関であったり、あるいは官公庁関係とかには確実に農大卒業生が増えてきています。農大がここにできなかったら農大の卒業生はこの地域にそんなにいないわけですから、そういった意味では毎年どんどん増えてきますから、徐々に影響力は大きくなってくるとは思います。例えばこのところ出なくなりましたが、箱根の駅伝などに農大が出ていたら、みんな応援しますよね。

姉崎 農大本体のOB組織の校友会の方は、北海道全域をとってみるとかなりの数になると思うのですが、それが新設学部ではあるけれども一定程度、直接間接の援助をしているとか、首長レベルでの市町村長の中にも農大のOBの方が北海道の場合あったりして、そういうことが強みとしてありますよね。

山 厚木のキャンパスの方で校友会をターゲットに物産を販売する話がありましたね。校友会だけでも相当いますからね。

小田島 今回、農大の仲立ちで、農大のキャンパスのある厚木市と網走市が友好都市として提携を結ぶことになりました。来年の2月に厚木が市制50周年記念で提携を結びたいという申し出がありまして。

光本 具体的に何か事業をなさるのですか。

小田島 基本的には物産交流になろうかと思っています。大学はその段階で仲立ちをただけということで、あとは市と市の交流ということになりますから、観光物産交流になると思います。

光本 網走は物産が豊かだと思うのですが、厚木の方の物産はあまり聞きませんが。

小田島 向こうの子どもたちとかをこちらに出して、体験させたいという話をしていました。すでに向こうのイベント関係の要請が今年あって、海産物等含めて大変な好評だという話です。

オホーツク・大学間交流協議会

石山 オホーツク・大学間交流協議会というのはこの東京農業大学がさがけとなってオホーツクでずっとやってこられたということで、今年確か15年目を迎えられて記念事業を農大のキャンパスでやるというお話を田中先生におうかがいしたんですけれども、市としてはこの大学間交流協議会にどのような協力をされているのでしょうか。

小田島 基本的には開催費補助金程度のものです。や

られていることに対しては、がんばっているなという話くらいしかなくて、そこにわざわざ関与しに行くものではないなと思っているんです。

石山 実際、参加されている方を見ると、自治体の職員の方々もそれに参加されたりとかしていますけれども、網走市からも行かれる方が多いのですか。

小田島 開催場所がいろんな大学所在地とかを回ってやっていますので、今回こういうセミナーをやるという内容をもらった中で、それに対して行けるものには行くという感じです。

姉崎 その場合、研修扱いですか。

小田島 そうですね。そのへんの話は黒瀧先生が最初から最後まで全部やっていらっしゃるので、いろいろお話が出るんじゃないかと思います。

姉崎 どうもお忙しいときにありがとうございました。